

# 中学1年生の ADHD の生徒を学級に位置づけた取り組み

—通常の学級における発達障害 (ADHD) の生徒と学級内の生徒たちとの関係の変容を通して—

中谷 愛<sup>1</sup> 芦澤清音<sup>2</sup> 杉本真理子<sup>2</sup>

<sup>1</sup>帝京大学教職大学院教職研究科 教職実践専攻 〒192-0395 東京都八王子市大塚359

<sup>2</sup>帝京大学文学部教育学科 〒192-0395 東京都八王子市大塚359

## 要 約

平成16年に「発達障害者支援法」が発足されて以来、文部科学省(2004)より特別支援教育の充実が強く示されている。本研究では、通常学級の発達障害のある子どもが在籍する中学校1年生の学級づくりの在り方を検討するためのモデルを提示することを目的として、ADHDのある生徒が在籍する学級の、担任の学級づくりの事例を分析した。実践の過程を分析したところ、「早期の校内支援体制の協力依頼による体制整備と連携」と「インクルージョンを視野に入れた担任の学級づくり」と「保護者との円滑な連携」によって、対象生徒と、対象生徒の所属する学級内の生徒との関係が変容し、生徒同士が互いに理解しあい、それぞれの役割が生まれ、学校生活で生徒一人ひとりの活躍が実現された。教師は発達障害について一定の知識を持つこと、本人と保護者の声を聞くこと、事前に小学校や関係機関から情報を得ること、日常的なアセスメントを行うこと等の必要性が示唆された。最後に、今後は、発達障害のある生徒の学習プログラムの作成や、学校現場のニーズを満たせる専門家チームの活用について検討されるべきであることを考察した。

キーワード：アセスメント、インクルージョン、学級づくり、学習指導、特別支援教育

## 1. 研究の目的

中学校は、生徒が複数の小学校から入学してくるため、個々の生徒を理解することが、中学1年生の学級担任にとって、学級経営の視点から最優先事項である。一人ひとりの生徒が、中学校という新しい環境の中で学ぶことに期待と不安をもって入学してくる。まず、学級担任は、そのような気持ちを受け止めなければならない。また、生徒理解に努めながら、生徒一人ひとりの良さを見つけ、伸ばすように指導していく必要がある。そのような学級担任の姿勢と取り組みによって、生徒たちは学級の中で安心して学校生活を送るようになり、生徒同士の良好な人間関係を築いていく。このことは、生徒たちが3年間の中学校生活を充実して送る土台となる。

一方、近年発達障害のある子どもが通常の学級に在籍するケースが多い。そのような場合、発達の困難や特徴に応える支援を行う必要性が高いにもかかわらず、生徒理解のための情報が十分に得られていないことがある。また、支援の具体的な方法についても、教員の知識が不十分なため、発達障害のある子どもを受け入れる体制が十分に整えられていないことが多い。そのような中で、

教員は、試行錯誤をしながら生徒と接し、対応しているのが現状である。

特別支援教育が始まり、3年目を迎えている。通常の学級に在籍する発達障害のある子どもの事例研究について、小学校では数々の取り組みが紹介されている。たとえば、今津(2008)は、小学校の通常の学級で、発達障害のある児童への支援と支援を支える学級づくりをPM理論のもとに相互補完的に実施し、対象児童が満足度と学習意欲を向上させた事例を報告している。また、櫻井・佐久間(2007)は、小学校の通常の学級の担任が、これまでに積み上げてきた学級経営を少し工夫することで、発達障害のある子どもへの支援ができることを示唆している。しかし、中学校の通常の学級における事例研究は非常に限られている。

小学校と同様に、中学校でも、学級担任による正しい子ども理解のもとに適切な指導を行う必要がある。しかし、小学校では学級担任が一日学級を見るのに対して、中学校では学級の担任だけではなく、複数の教員が教科指導を通して学級に関わっているという違いがある。中学校で適切な生徒理解を実現するためには、小学校以上に教員同士で情報交換を密に行っていくことが求められ

る。教師が生徒一人ひとりの理解を深め、教員間で情報を共有しあうことによって、生徒たちは安心して学級で学ぶことができ、達成感と自信を味わう経験を積み重ねることができる。そして、それが生徒たちの学習の意欲につながっていくと考えられる。しかし、発達障害のある子どもの行動によって、学級の中にある安心感が壊されることがある。そのような時、学級担任は、その子どもを集団の中から疎外していくのではなく、その子どもを学級の一員として、学級に位置づける指導を行う視点をもつことが大切である(浜谷2009)。そして、学級の生徒全員が授業や行事に参加していく姿勢をもつような集団作りを行うことが、学級経営における重要な取り組みであると考えられる。

そこで、ADHDのある中学1年生が在籍する通常の学級において、担任が学級づくりで成功した実践をとりあげ、その過程を分析する。中学1年生のADHDのある生徒Aは「友達と仲良く過ごしていきたい」という願いをもって中学校に入学してきた。入学当初から3月に至るまでに、Aと、Aの所属する学級内の生徒との関係が変容し、生徒同士が互いに理解しあい、それぞれの役割が生まれ、学校生活で皆が活躍できるようになった。その1年間の過程において、学級が変わっていくプロセスを分析して、成果のあった支援の在り方と課題を明らかにする。

## 2. 方法

### (1) 対象生徒の概要

学年は3クラスで、計100名弱の生徒が在籍する。地域の3つの小学校から中学校に入学してくる生徒で構成されている。小学校は単学級であるため、子どもたちは中学校に入ると、人数の多さに驚くことが多い。一人の子どもにとって、小学校時代に比べて、倍以上の人数の知らない友達が同学年にいるということになる。

#### ①中学校入学前の様子

Aの通っていた小学校の養護教諭からは以下のような申し伝えがあった。Aは小学2年生の時、人間関係のトラブルで転校してきた。パニックが起こることが日常的であり、小学5年生の時にADHDであることがわかったが、薬は飲んでいなかった。Aは、中学校入学を前にして、「小学校時代の自分のことを中学校の先生には知られたくない」と言っている。また、保護者が特別支援を希望し、特別支援コーディネーターと面談した時の保護者の話からは以下のことがわかった。Aは病名を知っているが中身は知らない。小学校でAと関わりをもった養護教諭が異動で、中学校に勤務となり、Aにとっては長い間よく

知っている養護教諭がいる保健室がいざという時の逃げ場となり、ヒーリングプレイスになっていくと保護者は考えている。

#### ②中学校入学時の様子

担任は、教員を11年間経験し、他の地域から異動してきて1年目の英語の教員であった。Aは「自分がADHDであることを担任の先生に知られたくない。」と言っていたため、担任は、小学校時代のことも、病名のことも全く知らぬふりをして、学級経営をスタートした。入学式翌日、新入生歓迎会で、会場である体育館から教室に戻る際、肢体不自由の生徒ととなり同士であったことから、階段を上る時に担任がAにその子の杖を運ぶことを頼むと、Aは快い返事をして、手伝った。担任が「ありがとう」と言うと、ニコッと笑顔を見せた。このやりとりが、担任とAとの最初の出会いであった。肢体不自由の子を助けるという役割がAに生まれ、クラスメートを助けるという活躍の場があることによって、Aがすぐに学級に適應できるのではないかと当時、担任と学年主任は考えていた。

#### ③Aと保護者の思い

Aと保護者は、「中学校生活を友達と仲良く過ごしていきたい」という共通の願いを持っていた。この願いを達成するために、まず、小学校時代に日常的に起きていたパニックを、中学校では、できるだけ起こさないように配慮していくことを、担任と、Aを支援していく教員の共通理解とした。

#### (2) 対象クラスの概要

学級在籍数は、27名である。学級の約半数が生活指導または配慮を必要とする生徒が所属する集団であった。

#### (3) 分析資料

以下の資料をもとに、分析を行った。

- ①担任が、管理職、養護教諭、特別支援コーディネーター、学年の教員と話し合っ作成した個別の指導計画
- ②担任がAと関わった時や、指導を行った時の記録
- ③校内の学生ボランティア4名が日々交代でAと関わり、その後作成したAの観察記録
- ④年度末に担任によって行われた英語科の研究授業の逐語記録

### 3. 結果と考察

Aが学級の中で良好な人間関係を築き、学級に位置づけられるまでの1年間の過程は、表1に示すように5つの段階に分けられた。

表1：Aが学級に位置づくまでの1年間の過程

<p><b>第1期 4月～5月 良いところと良くないところの両方が目立ち、学級内で孤立する</b></p> <p>○集団行動で目立ってしまうA クラスメートを助けることができる一方で、号令や話を聞く姿勢等、集団行動で、他の生徒と同じようにできないAに対して、校内での支援体制を整える。</p> <p><b>第2期 6月～9月 学級の中での困った子になり、クラスメートがあきれる</b></p> <p>○楽しくない運動会 立候補した応援団長になることができなかったことが原因で、運動会に楽しく参加することができない。</p> <p>○『10代のメンタルヘルス』への関心 発達障害についての知識を得ようとする。</p> <p>○授業での友達への一方的なコミュニケーション 友達とつかず離れずのやりとりが続く。</p> <p><b>第3期 10月～11月 クラスメートがAの行動に注目する</b></p> <p>○まとまってきた学級内でのAの存在の変化 秋の合唱コンクールでは、Aの頑張りが周囲に認められていく。しかし、一方で、日々のAの行動が荒れていったことから、Aを心配する学級内の声が大きくなってくる。</p> <p><b>第4期 12月～2月 クラスメートの援助が始まり、授業で活躍できる</b></p> <p>○英語の授業でのAの活躍 <b>【教材の中の難しい漢字が読める！】</b> すべて英語のやりとりの中で、Aは授業者の質問に答える。 <b>【住んでいる地域のおすすめの場所について、英文5文でライティングすることができる！】</b> Aが授業者やクラスメートとやりとりしながら、英文5文で、選んだ場所について説明する。</p> <p><b>第5期 2月～3月末 クラスメートと認めあえる関係になり、学級に位置づく</b></p> <p>○Aの行方不明に学級の女子全員が搜索 持久走の練習中、校外で行方不明になったAを学級の全員が心配した。見つかって、けがのないAに、皆がほっとして、喜ぶ。</p> <p>○楽しい創作ダンス クラスメートにアドバイスしながら、創作ダンスに取り組む。</p>
--

次に各期のAの様子を観察記録をもとに示し、考察を行う。

(1) **第1期 4月～5月 良いところと良くないところの両方が目立ち、学級内で孤立する**

○**集団行動で目立ってしまうA**

4月に行った担任による観察では、以下のような行動が観察された。

号令や話を聞く姿勢をはじめとして、集団の行動ができない場面が多く見られた。教室で、「気をつけ、礼」と学級委員が号令をかけた時、A一人だけは礼ができず、立ったままであった。また、学年集会で、開始前の整列を行った時に、「前へならえ」と号令がかかったときに後ろを向いて、後ろの生徒に会場中に聞こえる大きな声で、話しかけていた。周囲が驚いてAに注目し、それによって学年の集団行動が崩れてしまうという状況があった。教員が前で話をしている最中に、後ろの生徒に話しかけることが何度も見られた。

**考察：**入学して中学校生活が始まり、Aは、同じクラスの肢体不自由の生徒の松葉杖を持ってあげた最初の生徒だった。「新しい場所で気持ちを新たに頑張ろう」というAの気持ちを担任は受けとめていた。しかし、一方で、号令等の集団行動が他の生徒と同じようには出来ないAの現状があり、良いところと良くないところの両方を見ることで、担任にはAが学級の中で非常に目立った存在としてうつっていた。

この時期は、担任にとって、1年間の目指すべき目標や中学校3年間の過ごし方を生徒達に伝えるとともに、生徒達一人ひとりを理解していくべき、非常に大切な時期である。そのような時期に、Aのような行動が学級集団の規律を乱していると感じ、強い指導をする教員が一般的に多いことは確かである。しかし、教師は、一つの問題行動を正すことに固執するのではなく、その子どもが起こす問題行動の背景にあるものは何なのかを見つけ出そうと努めたり、子どもの良さを生かしていくような支援を行っていくことが大切であると考えた。

Aに対する学級内の生徒達の受けとめ方は否定的であり、トラブルが容易に起こる可能性を担任は感じた。そのため、学年と全体の職員会議で事後対応の方法を協議した。本人をめぐる口論や人間関係のトラブルなどがあつた場合、その場できびしくしかるのではなく、まず大人同士の話の聞き取りを行うことを共通確認した。小学校時代の養護教諭が本中学校へ異動しており、Aとはコミュニケーションが容易にとれる関係であった。この点を活かして、Aがパニックになった場合は保健室でクールダウンさせることとした。そのことを保護者から了解を得るとともに各教科担任へ伝えた。また、整列指導のときには教員や学生ボランティアからの声かけを行うことをお願いし、校内での支援体制作りを少しずつ整えた。

中学校1年生のスタート当初、教員は、子ども一人ひとりについて知らないところが多いことから、予想外の出来事に会うことが多い。そのような中で、4月の1か月間に、気になる子どもについて、どのように配慮するか、その体制づくりのために話し合うことは非常に重要である。体制作りは、担任一人ですすめるのではなく、学年や学校全体で、子どもについての共通理解を深めながら、支援の方法を具体化して、実践していくことが大切である。また、実践を通して、各教科担任が「このように支援したら、このような成果が出た」というような報告等は貴重であり、随時職員室で情報交換と共通理解が活発になされるべき重要な時期である。早期に担任と学年主任が、クラスメートを助けるというAの行動面の良さを見つけたことと、学年の教員と教科担任、養護教諭、学生

ボランティアが連携してAの課題から具体的な支援方法について協議できたことは、その後のAの学校生活の充実のために有効であった。

## (2) 第2期 6月～9月 学級の中での困った子になり、クラスメートがあきれる

### ○楽しくない運動会

6月に担任は、学級内での運動会の役割担当を決めている話し合い及び運動会当日、以下のような出来事を観察した。

Aは運動会で応援団長になりたいと思い、立候補した。他に一人の男子生徒も立候補したため、多数決により決めることとなった。結果は、その男子生徒に多くの票が集まり、Aは応援団長になることができなかった。その後、Aは「運動会が面白くない」と口にするようになった。当日、学級の優勝を決める最後の演目である「クラス全員リレー」が近づいた時、整列をせず、席から離れ、行方不明になった。

Aは興奮状態で保健室へ行き、養護教諭に話を聞いてもらっていた。クラスの生徒がAを探し、Aが保健室にいるのを見つけた。彼らが駆け寄ったときにはAは落ち着いていた。「全員リレーに出たくない」というAに対して「それではだめだ」と周囲が言い寄り、Aは結局リレーに出場した。

担任は、家庭に連絡し、保護者に、Aにとっていざというときには保健室が安全基地になっていることを伝えるとともに、もう一つの手段として、スクールカウンセラーが週1回相談室にいることも伝えた。数日後、担任は、集団生活を考えると、このタイミングに他の生徒に病名を知らせるべきではないかと悩んだ。知らせるとしたら、保護者の了解を得なければならぬので、保護者と連絡を取ったところ、「学校の教員だけならばいい」とのことだった。

**考察：**このような出来事の後には、Aが学級の中で冷やかしかるかいかいを受ける可能性がある。発達障害のある子どもが通常の学級に在籍して、学校生活を送る時に、担任が一番配慮しなければならないことの一つであると考える。学級の中で、特に、Aと違う小学校出身の生徒達は、Aが運動会の練習にまじめに取り組んでいないのに応援団長に立候補するという行動に、許せない思いを強くもっていた。そして、全員リレーに出ようとしなかったAをめぐる、「学級の中でこれからトラブルが起こるのではないか」ということが容易に予想された。つまり、Aの行動が、わがままであると周囲から見えたことが、からかいつながり、やがていじめに発展していく可能性もあるということである。実際、Aを軽くみてい

るような発言が見られ、その場で授業を中断し、指導をする場面も何回かあった。担任は学級のリーダーの生徒に病名とAの配慮について伝えた方がよいだろう、と考え、保護者へ相談した。「病名については、学校の教員だけならばいい」との返答であったため、学級に伝えることはしなかった。「通常の学級で、皆と仲良くやっていきたい」という思いをもつAの気持ちを大切に、その思いを実現するために、Aの集団生活の中でのふるまいをどのようにして改善すればよいのか、この出来事以来、担任は悩みながらAを見守っていた。

#### ○『10代のメンタルヘルス』への関心

6月19日の昼休みに図書室で、Bボランティアより、以下のような報告を受けた。

「図書室の奥の方にある『10代のメンタルヘルス』シリーズのおいてあるところで、『H・・・なんとかって障害ない?』と探していました。話を聞いていると、どうやらADHDのここのようでした。『お母さんがいっぱい集めてた』そうで、あまり表には出しません、彼女なりに気にかかっているようです。」

**考察：**学級の中で周囲からあきれられる場面がある中でAのこのような行動は、「自分が他の友達とは違うのではないか」という不安や、「友達と仲良く過ごしたい」という願いをもっているAが「なぜ、それが上手いかわからないのか」という疑問のような、心の葛藤があることが窺われた。以降、Aは、この病名にこだわるが続いていった。保護者は特別支援を希望していたため、学生ボランティアによるAへの援助等を実施していた。もう一歩踏み込んだ支援として、専門家チームから医師や心理士を派遣して、診断名についての専門的な説明をAや保護者に行うことができたのではないかと考える。当時は、Aについて、教育行政との連携等は行われていなかったが、今後は、そのような場合に、担任や養護教諭、特別支援コーディネーターを中心とする校内の教員がタイミングを見計らって保護者と連携し、校外の専門家と連携した支援が可能であれば提案し、実施していく必要性も高まってくるだろうと考える。

#### ○授業での友達への一方的なコミュニケーション

9月11日の4校時の選択美術の時間に、Cボランティアより、以下のような報告を受けた。

「Dさんと2人で集中せずに騒がしくしていました。途中からやっ和下書きを描き始め、彫刻刀で削る作業までたどり着きました。絵を描くことや、工作、彫刻は得意なようで、ちゃっちゃかやっている、という様子です。会話の際には人の話をさげぎる、他の人に話しかけているのにおかまいなしにしゃべりつづける、話の内容があちこち飛ぶといったことが見られました。」

**考察：**友達とのコミュニケーションの中で、会話の際に人の話をさげぎったり、他の人に話しかけているのをおかまいなしにしゃべり続けるというのは、4月当初から見られる、学年集会の時等のおしゃべりと同じような状況であることが、担任には容易に予想ができた。

担任は、まずは、Aの良さを見つけて、褒めていくことと、学級に広めていくことを行っていくことを中心に、支援をすすめていくことにした。まず、良いところについては、肢体不自由の生徒の補助を行うことに加えて、保護者や美術の先生、学生ボランティアからの情報で、「Aは、絵を描くことが好きである」ことがわかった。そこで、美術を専攻とするEボランティアに美術の時間に毎週Aと関わってもらうようにした。しばらく経ってから、「美術の時間は、かなり集中して作業に取り組んでいる」と褒めてもらった。この話を家庭に連絡したことがきっかけとなり、習い事等の、Aの家庭での様子を聞くこともできた。学校での子どもの様子の良いところを家庭に連絡することが、学校と家庭との連携の基盤を作ることにつながっていったと考える。

以上のように、日々、Eボランティアを活用した取組を継続した。「一方的なコミュニケーション」の中にボランティアが介入していることによって、Aが絵を描くことが好きであることがわかり、学級内で絵に興味がある生徒が、Aと関わるようになっていった。それは、Aが美術の授業をはじめとして、所属する美術部や選択美術の中でも、絵の好きな者同士による友達との関係が作られていった。以降、Aにとって、初めて自分を理解してくれた数人のクラスメートとの間で、学級内で良好な人間関係を作る基盤になっていった。

#### (3) 第3期 10月～11月 クラスメートがAの行動に注目する

##### ○まとまってきた学級の中のAの存在の変化

「Aが、帰りの学活でおしゃべりをしている時に、担任が注意をすると、周囲も注意し、Aは静かになる」とこのような流れが出来てきて、クラスには一つのまとまりが感じられるようになってきた。そのような中で、Aは、友達のことばを聞いて、自分の行動を改めることができ

るようになってくる時と、言われてもそれが聞こえず、授業や集会を妨害し、集団の中で突然、周囲の生徒が「おかしい」と感じるような行動をとる時の両方があった。Aの良さを知り始めた学級の数人の生徒がAに対して、「あきれ」という気持ちではなく、「どうしたんだろう」という気持ちを抱き始めた。

11月1日の5校時の数学の時間について、学級の生徒から以下のような話が報告された。

数学の時間にAは、ADHDの本を読んでいた。教科担任の先生から3回注意を受けたが、やめることができなかった。3回目の注意のあとに、Aはペンを机に叩きつけていた。それをやめるように注意されても、やめることができなかった。そのときのAには、教科担任の声が届いていなかったようだった。

その後、Aは、「ADHDの本の内容にショックを受けた。母親に伝えたい」と言っていた。そこで、担任は出来事を保護者へ連絡した。

翌日11月2日の午前中の国語の時間について、学級の生徒から以下のような話が報告された。

午前中、国語の時間に大声で歌を歌っていて、Aはハイテンションになっていた。

同日午後のセーフティ教室で、担任による観察から以下のような行動が観察された。

(全体集会で警察の方の話を書くという内容であった。)  
警察の方が話している最中、突然立ちあがり、学級内の一隅に座る男子の頭を叩き、「キヤー」という奇声を発した。警察の方は話をやめ、全員がAを注目した。会場の雰囲気が一瞬凍りつき物議を醸した。そのようなことが、その時間に連続してあった。

その後、Aは「体育の授業でハイテンションになっていたから」と言っていた。

**考察：**担任が学級の4人の生徒と立ち話をしている中で、「Aの様子をみて、今週は落ち着かなかった」との話があった。これを受けて、担任は、Aが集団に迷惑をかけるときは、周囲が注意するよう伝えた。生徒たちは「先生役だね」と言って了承した。学級内の2つのグループが、ともにAを支援できるようになってきた。学級の生徒によるAの支援体制が整い始めた。

Aが授業中にADHDの病名について本で調べ続け、止められない様子を周囲の生徒達が観察したことで、彼らのAの受けとめ方が変化した。Aに対して「Aはどうしたのだろう」という心配の気持ちが生まれていた。Aの

良さを知り、Aとの関係ができてきた生徒が、この出来事以降、Aが不安定な時には「Aを助けてあげなければならない」という気持ちを強くもつようになっていった。Aが給食中に、班のメンバーと一緒に食べることができず、自分の席を離れて、班のメンバーではない生徒と食べようとする様子が何度か見られたことがあった。その時は、彼らにAとは給食中ではなく、昼休みの時間に会話をしよう促したところ、それを実行することができた。同時期には、合唱コンクールが行われ、本番前には、学級の全員がそろって手をあわせ、掛声をかけて、「頑張ろう」と勝利に向けて心を合わせた。本番のステージで、Aは全身で歌っていた。Aはソプラノを担当していて、Aの声が他のクラスメートをリードする位、響く声を出して歌っていた。そのような、運動会の時とはまったく違い、学級の中でのAの頑張る姿を学級の生徒達は見逃さなかったのだと考える。

#### (4) 第4期 12月～2月 クラスメートの援助が始まり、授業で活躍できる

##### ○英語の授業でのAの活躍

給食後の昼休みは毎日、担任は教卓にいて、Aや他の生徒達とおしゃべりをする中で楽しい時間を過ごすことができた。Aはアニメが好きで、特に好きなアニメのストーリーや、そのストーリーに登場するキャラクターがどのような人物か、また何が面白いかについて、Aや他の生徒達は生き生きと語っていた。その時期に英語の授業では、一つのテーマについてペアになって「英語で30秒chat(おしゃべり)」を行う取り組みをしていた。「○は好きですか」と質問し、質問された側は「はい」または「いいえ」で答える。そして、「なぜ好きなのか(好きではないのか)」その理由を一言話すという活動である。担任は、Aの好きなアニメをテーマに設定してchatを行った。その時、Aに協力的な生徒とAとのペアリングを行い、Aやその生徒は楽しく取り組むことができた。

また、chat活動と並行して英語による「有名人紹介スピーチ」を行った。生徒達のそれぞれが好きな俳優・ミュージシャン・スポーツ選手・アニメのキャラクター等から好きな一人を選び、紹介するという活動に取り組み、学級全体が熱中して取り組んだ。Aもクラスメートが見守る中で、活動に取り組んだ。アンケートを行った結果、「有名人紹介」は1年間の英語の授業の中で、学級の生徒達が最も楽しいと感じた英語の授業での活動となった。

2月13日に筆者が授業者として行った英語の授業から授業逐語記録を作成し、以下のことがわかった。

##### 【難しい漢字が読めた!】

Aが授業者と英語による会話のやりとりに成功した活動

が見られた。次のようなやりとりであった。

T: And next... (「如月」と書かれたポスターを見せながら) Can you read this Kanji?  
 S: (A sanが) はい、はい、はい、はい・・・。(手は挙げていない。)  
 T: Yes, I can or No, I can't... Can you read this Kanji? How about you? F kun.  
 S (F) : No.  
 T: No. OK. How about you?  
 S (G) : No.  
 T: No. OK. H kun.  
 S (H) : No, I can't.  
 T: (手を挙げながら) Yes, I can. Raise your hand. (A sanだけが手を挙げている。)  
 T: Oh, good. You have to answer.  
 S (A) : Kisaragi?  
 T: Yes, that's it. Kisaragi. Very good.... It means Jan... sorry. It means February in English.

授業者が学級全体と英語だけでやりとりをする中で、授業者が示した「如月」と書かれたポスターから、学級の中でAだけが読むことができた。ここで、素晴らしいことは、Aが「如月」を読むことができたことだけではない。Aは「如月」のポスターを見て、読み方が分かっていたが、すぐに口に出して答えを言うのではなく、授業者が他の生徒に答えを促している間、待っていた。「わかる人がいますか、わかる人は手を挙げてください」と授業者が投げかけてから、Aはきちんと手を挙げることができ、答えたのである。また、すべて英語だけのやりとりの中での活動であり、Aは授業者が言っている英語を理解し、適切に答えることができたことも高い成果であった。

**【住んでいる地域のおすすめの場所について、英文5文でライティングすることができた！】**

1時間ずっと英語の授業に、Aは最後まで参加していた。授業の前半のイギリスについての説明に、動物の好きなAはピーターラビット等に興味を示していた。授業後のアンケートで、「イギリスについてどのようなことがわかりましたか」という質問に、「ピーターラビットは赤い服も着ること」と書いていた。スライドで示したピーターラビットの絵が印象に残っているようだった。絵を描くことが得意な、Aらしい観点からのコメントであった。

授業者は、「生徒たちが住んでいる街のお勧めのスポットについて、英文5文で紹介してください」という目標を示した。5文の中身については、おすすめのスポット

を伝えることや、「いつその場所をおとずれたか」、そしてそこで楽しむために「何をしたか」等を伝えていくことで5文を作成することを指導した。作業は10分程度であり、その中でAは、授業者に何度も質問し、また、クラスメートとやりとりすることで、最終的に5文を書くことができた。次のようなやりとりが行われた。

①Aと授業者とのやりとり(場所を考えている)

T: (全体にむけて) My favorite is I River. I River is my favorite. I visited there last April. I like it. I saw many sakura there. It is a beautiful place. What is your favorite?  
 S (A) : せんせいサミットって・・・(しばらくして) せんせい How do you spell サミット?  
 T: サミット。なにそれ?  
 S (A) : (声を大きくして) ○○○○○ (店の別名)。うちから歩いて5分くらい。  
 S (J) : スーパー。  
 T: ああ。ローマ字でいいよね。 S-a-m-i-t-t-o.  
 S (J) : おお～。  
 S (A) : ほら～。

クラスメートと一緒に、「サミット」というスーパーについて相談しあいながら、書いていた。スペルを授業者に聞く時には、「How do you spell～?」と聞くことが徹底されているため、学級の生徒達が授業者にそのように尋ねているのを聞いて、同じようにまねをしてサミットのスペルを聞くことができた。

②Aとクラスメートとのやりとり(いつおとずれたかを書こうとしている)

S (A) : なんて書いてある2行目、Kちゃん。  
 S (K) : 2行目?  
 S (A) : いつおとずれたか。毎年の春。  
 S (K) : 春?  
 S (A) : 春。春。あのね、健康診断の春。

①で相談していた生徒とは別の生徒と話をしていた。1年間Aを援助する仲間を中心になっている、絵の好きなクラスメートのKさんであった。Kさんは、自分の作業を続けながらも、Aの投げかけに答えてあげていた。Kさんは、Aの言ったことをエコーしているだけなのだが、Aがのびのびと表現できている様子が窺えた。

③Aと授業者とのやりとり（おすすめの場所で何をしたかを思い出している）

S(A)：そこで何したか…。えっと～。食べ物、ショッピングでしょ。  
(しばらくして)  
T: Went shopping. Went. W-e-n-t.  
S(A)：せんせい なんだっけ？ W・・・  
T:・・・ W-e-n-t.  
(しばらくして)  
S(A)：せんせいショッピングってなんて書くんですか。  
T: Went shopping.  
S(A)：Went shopping.  
T:さっき言ったよ～ w-e-n-t.  
S(A)：E-n-tだって。  
T: S-h-o-p-p-i-n-g.

①で一緒に相談しあっていたJさんと一緒に作業を続けながら、何度も授業者にスベルを聞き、ワークシートに書いていた。

④Aが書いた文章

Samitto is my favorite place. I visited last spring.  
I went shopping. I enjoyed it very much. It is a very fun place.

翌日に授業の参観をしていた方々から、次のようなAへのメッセージが届いた。

Aさんへ  
・Aさん、「如月」をぱっとわかってすごい!!元氣いっぱいでした! 2名  
・Aさん、ライティング活動のとき、とても意欲的に取り組み、先生にも積極的に質問していいなあと思いました。1名

**考察：**学級の中でのAが、安心感がある中で取り組んでいることを確認した。その背景にあるのは、授業で、A自身が感じたことを口に出した時に、それを否定する生徒がいないことと、Aが言ったことを受け入れて、返してくれるクラスメートの存在であったと考える。お互いに学びあっていくことで、高い目標を実現することができていた。Aだけではなく、一人の子どもにとって、集団の中で、安心していられることは、学ぶ基盤ともなる、非常に大切な要素であることを改めて、確認することができた。この時期には、2月に行う学年行事に向けての準備が進められていた。担任は、Aが学年行事のしおりの表紙の絵を作成することで、Aの持ち味が発揮できる

場となると考えた。そこで、学年主任の理解を得ると同時にAに担当を依頼した。Aは承諾し、描いてきた。また、給食当番や教室掃除を当番でなくとも手伝う姿が見られた。特に、ぞうきんがけが得意で、掃除強化週間になると担任と競争しながら、取り組んでいた。書写での受賞もあり、担任は保護者に随時連絡し、成長を共に喜んだ。  
(5) 第5期 2月～3月末 クラスメートと認めあえる関係になり、学級に位置づく

○Aの行方不明に学級の女子全員が捜索

2月15日の体育の時間に、学級の生徒から以下のような話が報告された。

体育持久走の最中、校外に出て、走っていた際にAは道を間違えてしまった。左折しなければならないところをそのまままっすぐ走ってしまい、しばらく待っていても校内に戻って来ない状態が長く続いた。行方不明であることがわかったとき、学級の女子のリーダーが探す場所を全員で分担し、Aを探し続けた。見つかった後も、教室に女子が戻ってきたときに、Aに対して否定的な発言をする男子はいなかった。Aが見つかったことを皆で喜んだ。

**考察：**30分程たっても、Aは見つからないため、家庭に連絡をとり、姉が来校した。体育の教員は担任と一緒にAを探した。しばらくして、Aが見つかり、安全を確認した。Aと周囲との人間関係が一層良くなってきていることを担任が感じることができた。運動会のときにAが行方不明になったときと比べると、生徒達のAに対する気持ちは質が異なり、Aを皆が心配していた。以降も、集団行動等で、クラスメートからの指摘によって自分の行動を直す場面が見られた。学生ボランティアがAに関わるように、周囲がAを援助している場面を担任は何度も見た。そのことを担任は来校した姉に伝えた。

○楽しい、創作ダンス

3月の体育の授業に担任が観察を行い、以下のような行動が観察された。

「体育で、学級の女子全員で、いくつかのグループに分かれ、創作ダンスに取り組んでいるので、先生も見に来てください」と、女子学級委員が担任に伝えてきた。そこで、担任は、活動の様子を見に行った。すると、そこで、Aがとても楽しく取り組んでいた。一方で、同じグループの肢体不自由の生徒は、激しい動きが難しいようであった。

**考察：**ダンスの練習を見た担任は、学級委員の生徒に、Aが創作ダンスのリーダーとして、肢体不自由の友達を支援できるようにアドバイスするよう伝えた。学級委員



の生徒は了承し、Aにアドバイスをした。発表の時には、学級の女子全員が楽しむことができていた。担任は、Aが肢体不自由の子が参加できるようなダンスを創作し、一緒に取り組める発表にしたことを確認した。Aが、持っている力を学級で発揮しながら活躍し、クラスメートと助け合う関係になり、学級に位置づいていることを確認できた。

#### 4.総合考察

Aが、一年間を通じて「皆と仲良く過ごしたい」という願いを叶えて、学級に位置づけられていったその過程を整理することで、以下のような成果と課題が明らかになった。

##### (1) 成果のあった支援

担任が行ってきた、「早期の校内支援体制の協力依頼による体制整備と連携」と「インクルージョンを視野に入れた担任の学級づくり」と「保護者との円滑な連携」の3つが、Aに対して働きかけた様々な支援の取り組みが成果につながっていった要因であることが明らかになった。

##### ①早期の校内支援体制の協力依頼による体制整備と連携

第1期では、Aが、集団行動ができないことから、学級内で孤立している場面が多く見られた。そのときから、担任は、一人でAの行動について解決することは難しいことを痛感していた。観察から得られた情報を校内の教員と一緒に共有し合いながら、対応策を考えていかなければならないと考え、以下の3つの体制を構築した。

##### ○ヒーリングプレイスとしての保健室

Aについて、共通理解を図るために、担任がまず行ったのは、小学校時代のAをよく知る養護教諭との面談であった。外部機関で診断名が出ていたことを知ることができたことは、後の支援計画を立てるときに有効な情報であった。また、特別支援コーディネーターが保護者との面談を行い、その中でも保護者から、養護教諭との関係が小学校時代からあり、保健室をヒーリングプレイスとして活用できることを確認することができた。学校に逃げ場があることは、Aにとって大切なことであり、入学前からそのことを確認できたことは非常に良かった。

##### ○コミュニケーションをとりやすい学生ボランティアの存在

Aにとって、学校で、身近にコミュニケーションをとることができ、思っていることをアウトプットできる養護教諭以外の存在として、学生ボランティアがいた。授業や休み時間等、すぐ話をして、聞いてもらえる距離に学生ボランティアがいて、共感してくれたことはAに

とってありがたい存在であったはずである。また、Aと学級の生徒をつなぐパイプ役として学生ボランティアが紹介し、クラスメートとのコミュニケーションを調整したことは大きな効果を生み、Aがクラスメートとの良好な関係を作るきっかけとなった。さらに、学生ボランティアは、Aと関わる中で確認したAの良いところや課題について、記録をとっていった。その記録を通して担任がAの他教科の取り組みの様子を知り、Aへの理解をより深め、それをAへの声かけをはじめ、個別の指導計画を作成していく際に役立てることができた。

##### ○学年の教員や教科担任等との共通理解

初回の学年会議では、Aの診断名と、パニックが起ったときの対策と予防策、そしてAの良いところを見守っていくことを共通理解した。また、初回の全体職員会議でも担任が同様の内容を伝え、確認した。様々な教員が一人の子どもと関わっていく中学校では特に、このような共通理解をもつことが重要であったと考える。また、共通理解は、早期に行うことがより大きな成果につながっていくが見えてくる。

また、1年間を通じて、特に1,2学期を中心に担任が、Aの良いところを褒めてあげたことと、課題に対して支援を実行していくにあたって、管理職や特別支援コーディネーターから理解とアドバイスを得ながら進めていったことも、非常に有効なことであった。

図1に示すような校内での体制が年度当初から行われ、Aにとって安心につながる環境を校内で早期に作り、授業の中での具体的な支援を各教科の教科担任をはじめ、4人の学生ボランティア等が多方面から行っていった。このことがAへの支援の土台となっていったことは明確である。

そして、学級担任、学年の教員や教科担任、学生ボランティア、養護教諭の4者のAに対する関わり方が、Aへの支援の土台となっただけでなく、学級内に、「障害のある子を否定してはいけないという価値観」を浸透させた。障害のある子はAだけではなく、学級内に数人在籍することもあり、大人がそのような子どもに関わっている姿勢が、友達同士の他者理解の醸成につながっていった。

##### ②インクルージョンを視野に入れた担任の学級づくり

学級内で、生徒達が「障害のある友達とどのようにつきあうか」、ということを考える学級になっていった背景には、校内の教員のAに対する関わり方がモデルとなったこと他に、インクルージョンを視野に入れた担任の学級づくりがある。担任の信念を一貫して学級内に浸透させていくような学級づくりが求められる。肢体不自由の生徒が給食の準備ができないとき、周囲が自然に

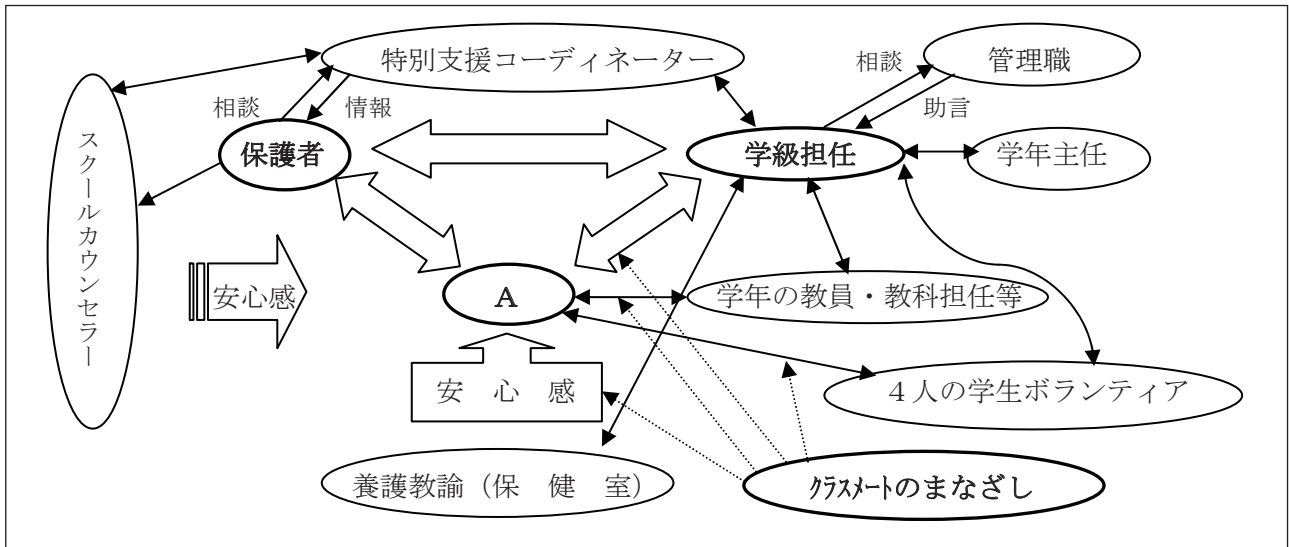


図1：Aを支援するために構築した校内体制とクラスメートのまなざし

援助できること、Aが落ち着かない時には、周囲がAへ叱責をするのではなく、まずはAの困っていることに共感してあげながら、なぜそのような状態になっているのかを考えること等を担任が行い、障害のある子どもへの望ましい対応を行動で示していった。

○「もしも、パニックが起こって一人の友達が別室に行ったとき、その友達のことをからかったり、また、誰も心配しないような学級にしてはいけない」という心構えをもった生徒指導

第2期では、運動会のときに、行方不明になったAのことを「走る順番だから戻ってくるように」と言っても、Aのことを心配する友達はいなかった。このように学級から完全に孤立してしまったとき、担任は同じようなことがまた起これば、今度はAをからかったりするような雰囲気が作られてしまう危機感をもっていた。

学級担任は、そうならないと強く感じた。「もしも、パニックが起こって友達が別室に行ったとき、その友達のことをからかったり、また、誰も心配しないような学級にしてはいけない」という心構えをもって学級づくりを行い、学級の生徒一人ひとりと丁寧に接することが重要であると考えた。障害のある子への関わり方については、担任が率先して関わり、行動を示しながら、同時に生徒達の行動を観察し、その中で気になる行動については、その行動をとっている生徒の抱えている背景は何かを1学期終了後の三者面談等を通じて話を聞き、本人に気付かせるとともに具体的な行動につながるアドバイスを行った。浜谷(2006)は、保育において包含(インクルージョン)の重要性を指摘し、「子どもはそれぞれ異なる発達要求や興味や能力をもっていて、それに

じた保育を求めている。保育者は集まった子どもの意見表明を受け止め、全体の保育を創造する」と述べている。これは、子どもたちを一定の均質な集団を作ることを目指す統合(インテグレーション)とは異なるものである。一定の均質な集団に適応できなければ排除するのではなく、インクルージョンでは創造的な保育を目指しており、これは中学校における学級経営にも同様に有効であると考えられる。また、浜谷(2007)は、「教師は、子どもがひとりぼっちにならない学級づくりを目指すために、授業実践の力量を高め、長期的な視点で学級づくりに取り組む必要がある」と言及している。これらのことを踏まえ、中学校では、教師が人権を尊重する意識を持ち、問題行動には毅然とした態度で指導を行うと同時に、生徒が「楽しい」と感じる授業作りを日々実践していくことが、生徒たちの充実した学校生活を送ることができることにつながると思う。そのようなことを目指し、担任が日常的に心がけたことは以下の2つであった。

一つは、「からかいや冷やかしがあつた場合は、その場での指導を行うこと」であった。特に、人間関係が十分に築かれていない1学期当初は、そのような場面が頻繁に起こった。障害がある友達に対して、言ってはいけない言葉があるということについての指導は、後ではなく、その場で指導することが、いじめに発展させることをくいとめていく日常的に行うべき重要な指導であることを確認した。

もう一つは、担任が、積極的にAや学級の生徒達と関わる姿勢を示すことであった。第4期では、Aが絵が好きであることから、そのような話を昼休み等にしていくことによって、アニメが好きなことが分かってきた。A

の友達もそのアニメが好きなのであった。そこで、英語の授業の教材にそのアニメを使って、授業を行った。そのような担任と生徒との関係づくりが、学級内の生徒同士の関係をつなげていった。

#### ○子どもの好きなことで活躍できる環境の設定

「障害のある子は、他の友達よりも取り組みに時間がかかるのだから、集団のためになることを何もやらなくていい」等という価値観を学級担任が示したとすると、おそらく学級づくりは上手くいかない。そうなっては、いじめに発展するケースも出てくることも考えられる。障害のある子どもも、集団のために貢献できる取り組みがある。得意な活動を担任が見つけて、その取り組みを集団のために取り組むように促し、集団の中での役割をもたせることが重要である。

第4期では、Aは絵が好きなおことから、担任は学年主任に許可を得て、Aを学年行事のしおりの表紙の絵の作成担当にした。Aの描く絵は描くたびごとに上達していった。また、体育で行った創作ダンスでは、好きが得意となり、クラスメートに教えることができたことも成果の一つであった。このように、日々の授業や行事で、Aが表現活動を中心として活躍できたことは、やがてはAの良さを周囲が知り、それが集団の中でのAの役割となって、Aとクラスメートとの良好な人間関係に発展していった。

#### ○座席の配慮と指導

2学期に、Aを窓側の座席にして、Aの集中できない状態を生み出してしまったことがあった。英語の授業中、窓が半分空いていた時、強い風が吹き、カーテンがひらめいた。そのため、Aは授業に集中できず、ひらめくカーテンをよけるような様子で、ずっとカーテンと格闘していたことがあった。カウンセラーのご指摘をいただき、座席を窓側から変更して、廊下から2列目の1番前の座席に設定しなおした。第4期には、後ろには援助してくれる生徒がいるように座席を配置すると、Aは、授業中に活躍した。そのような座席配慮は効果があることを確認した。

一方で、第3期に、Aが給食中に、班で食べるという座席ルールを守ることができず、人間関係ができてきた生徒のところへ移動して食べようとする様子が何度か見られた。話をしたいクラスメートができてきたことはとても良いことであったが、ルールを守りも教えなければならなかった。そこで、給食中のルールについては徹底することを指導するとともに、給食中ではなく、昼休みの時間に会話をするように、まず周囲の生徒達に促していったところ、それを実行することができた。

このように、Aにとって活動が円滑に進まないときや、

集団の行動ができていないときには、その時々によって、担任の柔軟な対応が解決につながっていくことがわかる。担任と学級内の生徒たちとの関係が良好に築かれていると、Aへの支援が非常に円滑に実現できるのである。

#### ③保護者との円滑な連携

もし、保護者に学校で起こったトラブルの報告だけに終始した連絡をするだけでは、その保護者は「担任は自分の子どもを見捨てているのではないか」と解釈することもある。場合によっては、連携するはずが、学校と家庭の対立関係を生み出してしまふ可能性も出てくる。

保護者との連携のきっかけとなったのは「子どもの良いところを見つけた時に、そのことを随時報告すること」であった。担任が電話等で報告するとともに、1学期と2学期の終わる頃行う三者面談でも伝えた。その中で、クラスメートとの様子や、頑張ったこと等について話をした。保護者との関係が円滑にできてきたのは、そのような学校での活躍の報告をしているうちに、学校の出来事をAが保護者にどのように話しているかということや家庭での様子を保護者から聞くことができるようになった。2学期末の面談では、担任は、保護者から「子どもをこの中学校に入れて、良かった」との話をいただくことができた。Aには、書写の受賞をはじめ、しおりの表紙の絵の作成、美術の授業や美術部での活躍、掃除の時に自主的に行ったぞうきんがけや、給食の時に当番ではなくても行った配ぜんの手伝い、そして合唱コンクールでの頑張り等、良いところが沢山あった。これらのことを保護者にすべて伝え、一緒に喜ぶとともに、その後の支援の方向性を考えていく姿勢を担任がもったことが連携のポイントであった。

#### (2) 指導上の課題

次の4点が指導上の課題として挙げられる。

##### ①診断名についての理解の必要性

第2期では、Aが小学校5年生で外部機関から診断されたADHDという病名について知ろうとして、図書室で『10代のメンタルヘルス』という本を読んでいたことがあった。それ以降も、病名への関心が続き、不安定な状態が続き、授業よりも、病名について調べることを優先してしまうようになっていった。運動会以降、Aは、友達に認められていないことについて疑問を感じ、そのときから、「どのようにふるまえば、周りから受け入れられるのか」ということと、「その病名は治るのか、治るとしたら、担任が知らないうちに治してしまいたい」「定期考査があるたびに、友達は慣れていっているのになぜ自分は慣れないのか」といった不安やあせりが背景にあったのではないかと考えられる。そのようなAの気持ちを担任は支えていくことができなかった。2学期末に行った

面談で、保護者の了解を得て、「ADHDであったことを知っていた」と担任はAに伝えた。そのときのAの複雑な表情を忘れることができない。Aへの心のサポートがきちんとできなかったことを担任は反省しなければならない。発達障害のある子どもが、診断名を知った時、それから先の生活の中で、その診断名にふりまわされないようにしていくための周囲からの支援が必要であると考ええる。つまり、タイミングを見て、診断名についての専門的な説明がきちんと子どもや保護者になされるべきであったと考える。「将来どのようにして社会生活を送っていくか、その土台ともなる中学校生活を今、どのように送るべきなのか」、もっと積極的にAや保護者とともに担任は考えていくべきであった。『10代のメンタルヘルス』を読むAのことを気にもとめないのではなく、その行動からのAの内面の思いについて理解しようとする姿勢が必要であった。今後は、このようなケースに応えられるよう、保護者とともに子どもの将来のことを考えるとともに、専門家チーム等との連携も検討していくべきである。

## ②発達障害が脳の機能障害であるということへの理解の必要性

第4期の2月13日に行った研究授業の逐語記録から、Aのある言動が、状況推理ができていない、いわゆる「心の理論」が構築されていないために起こっている場面があったことを確認することができた。以下のような言動場面である。イギリスについての理解の導入のため、スクリーンにピーターラビットとハリーポッター、そしてシャーロックホームズの像の絵や写真を次々に出しながら、授業者が生徒たちにイギリスにあるキャラクターの説明をしている場面である。学級にはシャーロックホームズの大好きな生徒Bがいて、そのことを学級内の友達も知っている。そこで、授業者はシャーロックホームズの像の写真が出たところでその写真を指さしながら生徒Bを指名し、「これはどうですか、Bくん」と尋ねている。Aは、この状況で、Bがシャーロックホームズを好きなことから授業者がBを指名しているとは思わず、シャーロックホームズの像イコールBくんであると感じている。

T: This is Peter Rabbit. This is Harry Potter, and...  
What's this? B kun?  
S(A): Bなのこれ?  
T: No.  
Ss: (笑)  
T: (Bくんをみながら) You like it!  
S(A): Bなの?  
S(B): Holmes.  
T: Do you know the name of the street?  
S(B): Baker Street.  
S(A): ……….

子どもに「心の理論」が構築されていない場合、このように、コミュニケーションがすれ違ってしまいう場面が起こることが予想できる。教師が子どもの行動が少しおかしいと感じた時、その背景にある発達理論を知識として知っているかどうかは、生徒理解を正しく行う教師としての専門性を磨く上で、非常に大切なことである。

## ③子どもの行動の改善についてのアイデアを日常的に考え、生みだしていく必要性

第2期の運動会では、Aは協力を欠いた行動によって、周囲から否定的に見られる出来事があった。Aの場合はその後、日々の授業の中で、好きな絵を通して友達との関係が育まれ、数ヶ月後に行われた合唱コンクールでは協力して取り組む姿があり、学級でのAの受け入れられ方が変化していった。

そのような取り組みがもっと綿密に行われる必要があると考える。美術の授業や行事等だけでなく、例えば、担任が学活や道徳の時間にも、互いに友達の良さを見つけていけるような取り組みを計画し試行することで、Aが学級に位置づくという目標の達成度が高くなっていったのではないだろうか。そのためには、日常的にアセスメントを行うことがとても重要であると考えられる。浜谷(2009)は、アセスメントについて次のように述べている。「好ましくない行動が生じる状況を明らかにすることは、問題行動の予防という点で、役立つことがある。しかし、それ以上に、肯定的な行動が形成される状況をできるだけ豊かに描くポジティブなアセスメントによって、子どもの参加を支援することができる。」このようなアセスメントを行うことで、教師は子どもの良さを生かす教材づくりや活動を考え、楽しい授業を練り上げていくことができる。と考える。

## ④学級に位置づいた次なる急務は学習の定着

Aの学習状況についての困難は、まず、プリント類の整理と、各教科の持ち物をそろえることであった。失くしてしまうことが続いたため、各教科担任がAの必要な

ものを預かるという方策をとった。数学ではコンパス、家庭科ではソーイングセットという、教科独特の持ち物になると、準備ができていないために、Aはイライラしてしまうことも多かった。そのような教科の授業においては、学生ボランティアが共感したり、声をかけたりしてAにかかわることで、Aは落ち着いていった。また、ノートの取り方やまとめ方等で、Aは色ペンを使うことで、記憶に入りやすいことがわかったため、そのような取り組みを継続して行うことを大切にされた。また、国語では、漢字の練習等で、繰り返しを多く用いた授業を行い、「できる、わかる、したがって、楽しい」という連鎖ができてくることを確認できた。このような情報を各教科担任で共有し、各教科ごとにできる授業の工夫を行い、Aにわかる授業を行っていくことが重要である。もう一つは、第4期の英語の授業でAが行ったような、授業者や友達と関わりあいながら学びあえるという活動形態をできるだけ50分の授業の中に取り入れることである。学生ボランティアがいなくても、そのような授業形態によってAは活躍できるからである。このような取り組みを日常的に行い、Aの学習の定着を目指していくことが今後の課題である。

## 引用文献

- 浜谷直人. 2009. 発達障害児・気になる子の巡回相談  
すべての子どもが「参加」する保育へ ミネルヴァ書  
房：195-218
- 浜谷直人. 2007. 「支援対象児がいる」のではなく「支援  
対象状況がある」クレスコno.80：24-27
- 浜谷直人. 2006. 障害児等のインクルージョン保育を支  
援する巡回相談 心理科学第26巻第2号：1-10
- 今津恵. 2008. 発達障害のある児童へ配慮した授業作り・  
学級経営の在り方について－通常学級の担任支援を  
通して－特別支援教育コーディネーター研究3号：  
19-22
- 文部科学省. 2004. 小・中学校におけるLD(学習障害)、  
ADHD(注意欠陥/多動性障害)、高機能自閉症の児  
童生徒への教育支援体制の整備のためのガイドライ  
ン(試案)1-109
- 櫻井久美子, 佐久間宏. 2007. 通常の学級における特別  
な支援を要する子どもたちへの支援－集団指導の中  
でできる指導法の工夫に着目して－宇都宮大学教育  
学部教育実践総合センター紀要第30号：183-196